

『シティ・オブ・ゴッド』

2002年／ブラジル／フェルナンド・メイイレ監督作品

鶏から始まるギャングストーリー

会員 林 美桜 (72 期)

この映画は、鶏から始まる。

足を紐で繋がれ、今にも調理されようというところで一羽の鶏が脱走する。逃げる鶏。それを無邪気に追う銃を持った子どもたち。鶏を追った先に、突如現れる警察。子どもたちと警察が銃を向け合う。間に挟まれた鶏、そして主人公。

この、何が起きているか分からないが何かが始まるワクワクがたまらなく好きで、私は何度もこのシーンを観てしまう（「TENET」冒頭3分も同様の理由で何十回と観てしまっている）。

本作は、鶏「大脱走」物語ではなく、ブラジルのリオデジャネイロ郊外にあるスラム街、神の街（シティ・オブ・ゴッド）で生きる子どもたちの話である。神の街では、子どもが当然のように銃を持ち、強盗をし、コカインを吸う。そんな神の街に、ギャング3人組がいた。最強と思われた3人であったが、モーターの襲撃事件をきっかけに、彼らの時代はあっさり終わってしまう。次に現れたのは、3人組から蚊帳の外として扱われていたリトル・ゼであった。

リトル・ゼは、その野心と残虐さを武器に神の街の中でのし上がって行くが、敵対するセヌーアとの抗争が激化し、煉獄だった神の街は地獄となった。血で血を洗う抗争や幼い子どもたちが殺し合いをする悲惨なストーリーが描かれているが、陽気な音楽と湿度が低く彩度の高い映像とともに軽快なテンポで進むため、見入ってしまう。

私は、マフィア・ギャング映画が好きなのだが、

「ゴッドファーザー」でも、「スカーフェイス」でも、「グッドフェローズ」でも、彼らの世界にはルールがあり、ルールのもとで社会が成り立っている。

しかし、本作の子どもギャングたちにはルールがない。スカしているだけでも殺す理由になる（原則的に一般人は殺さないというルールがあったが、すぐに例外が原則になった）。その無秩序さが本作の衝撃度を増している。

最後まで観賞し「あー楽しかった」と思ったところで、エンドロールで流れるニュース映像と「事実に基づいた物語」の字幕にハッとさせられる。本作は、ブラジルのスラム街「Cidade de Deus（ポルトガル語で「神の街」）」で生まれ育った作家が自身の経験をもとに書いた小説を原作としており、実話に基づく作品なのである。キャストも、一部の役者を除き、スラム街で暮らす人々約200人に演技指導をし、アドリブメインの演技を撮影している。本作で描かれている悲惨なストーリーは誰かにとっての現実なのである。それを手放しで楽しんでしまったことに罪悪感を覚えるが、普通は目を背けたいくなる現実でも見入ってしまうところが映画の良いところでもあり、また、本作が傑作と言われている理由でもあると感じる。

私は初めて本作を観た後、あまりの衝撃にしばらく呆然としてしまった。本作の面白さは私の稚拙な文章では到底表現しきれないが、ぜひ多くの方に観てほしい。また、執筆にあたり「心に残る映画」を1本に絞れず、文中に無理矢理引用している。どれも名作であり、ぜひご覧いただきたい。